

「高校卒業後の生活と意識に関するアンケート」調査 にご協力いただいた皆様へ

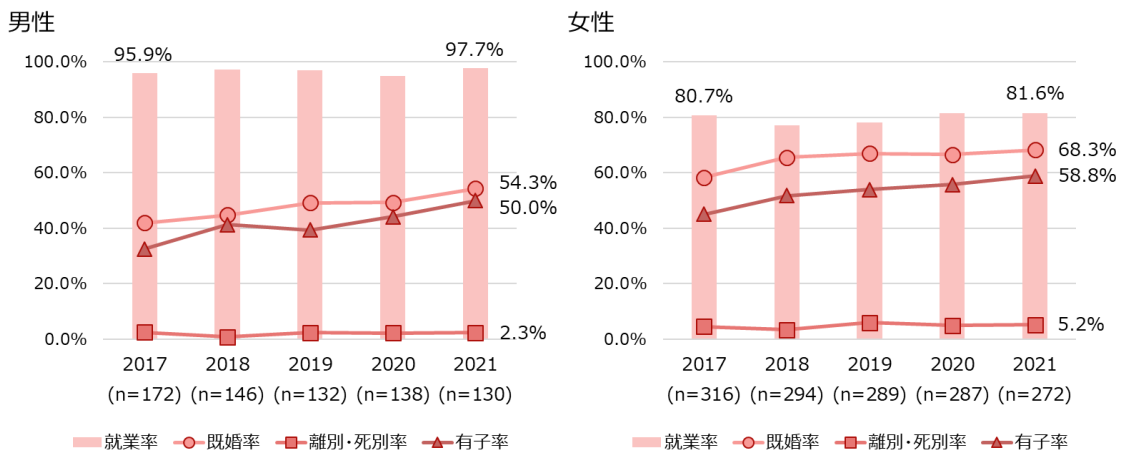
昨年の秋には、第17回「高校卒業後の生活と意識に関するアンケート」調査にご協力いただき、ありがとうございました。403名（調査時の年齢：35～36歳）の皆様から貴重なご回答をお寄せいただきましたこと、大変有り難く思っております。

遅くなりましたが、昨年度の調査結果の一部をお届けいたします。今回は、新型コロナウイルスの影響、自由記述からみた2020年・2021年、また2018年度から皆様の配偶者・パートナーの方にも併せてご協力いただいております調査のお礼と結果について、まとめております。なお下記のサイトでは、より詳しい調査結果をご覧いただけます。ご高覧いただければ幸いです。

<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/socialresearch/JLPSH/outcome.html>

皆様の高校ご卒業時から開始いたしました本調査も、これまで17回が終わり、本年で18回目を迎える運びとなりました。皆様には長らく本調査へのご支援をいただいておりますこと、改めて深く感謝申し上げます。そして本年の調査にも、何卒ご協力たまわれますと幸いです。よろしくお願い申し上げます。

1. 2017年以降の生活状況の推移

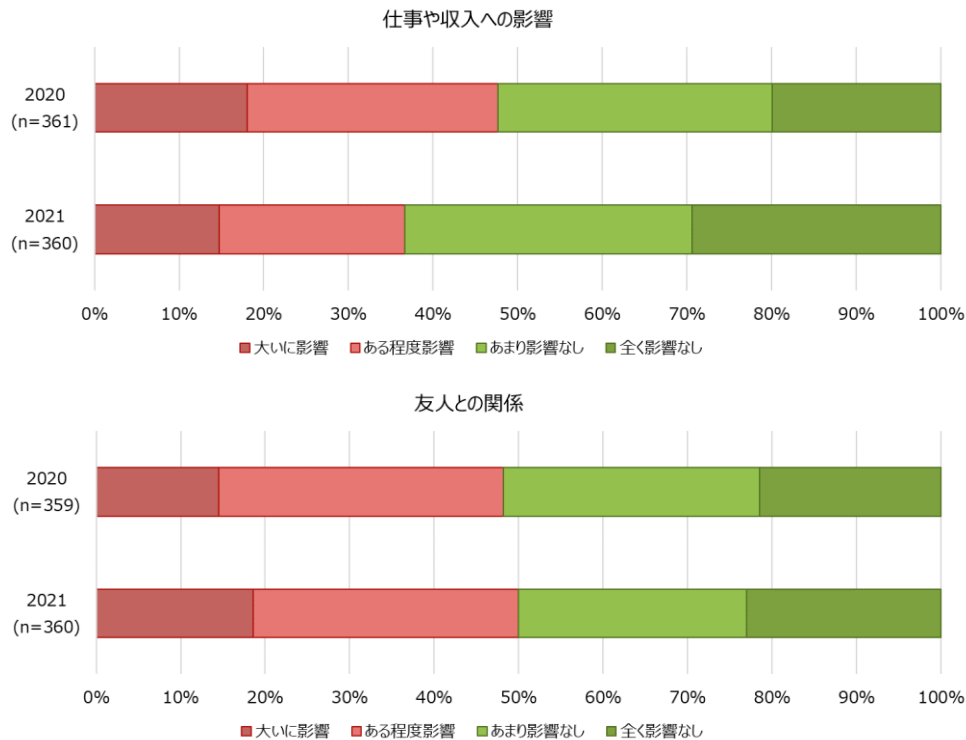


家族形成は引き続き落ち着いた状況 子どもの成長に伴うライフステージの変化の兆し

2017年から2021年までの5年間の、就業者、既婚者、離別・死別者、子どもがいる人の割合（有子率）を、男女別にグラフにしました。

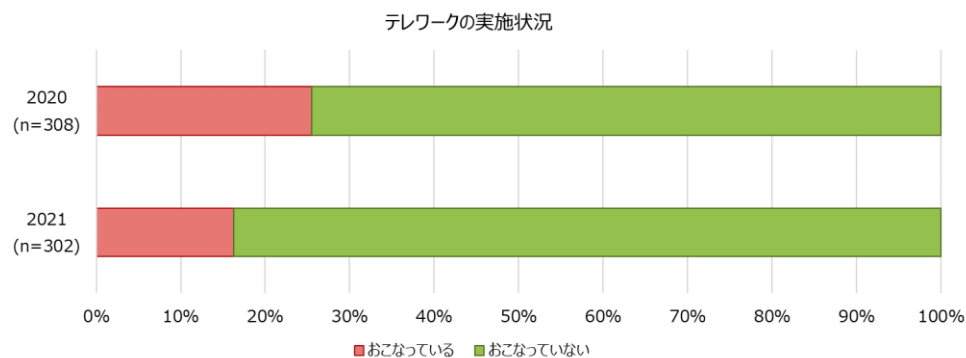
まず男性については、就業率が90%以上で推移しています。既婚率は継続して上昇傾向にあり、有子率も50%を上回ろうとしています。対して女性は、既婚率や有子率はやや増加していく傾向が続いています。就業率については、2018年の77.2%を底に緩やかに上昇してきており、80%前後で推移しています。この背景には、出産や子育てで仕事を離れていた人が仕事に復帰されたことによって就業率が上昇したことが考えられます。子どもの成長に伴って次のライフステージへと変化していく様子がうかがえます。

2. コロナ禍の影響



仕事や収入に対する影響は 2020 年に比べて縮小 友人関係への影響が懸念される

なかなか終息の見通しがたたないコロナ禍ですが、その影響について、2020年と2021年を比較してみました。仕事や収入に対する影響については、影響があると回答している比率が縮小していることがわかります。一方で友人との関係についてみると、2020年と2021年であまり変化がみられません。コロナ禍であっても継続していかざるを得ない仕事に対して、友人と会ったり、遊んだりすることは、いまだに控えられているのかもしれませんが、こうした状態が今後どのように影響してくるのか懸念されます。



コロナ禍で話題になったテレワーク 実施は一過性で、定着はしていない様子

コロナ禍で急速に導入が進んだといわれているテレワークについては、高卒パネルでは、実はそれほど実施されていないという結果になりました。さらに2021年の実施率が下がっていることから、一旦はテレワークを実施した場合でも、それが継続していないことが考えられます。テレワークの実施率が高いといわれている三大都市圏以外の方にも回答していただいている高卒パネルの特徴がでているのかもしれませんが、

3. 2020年・2021年は、どのように語られるのか

2020年		2021年	
コロナ	249	コロナ	196
思う	196	思う	160
仕事	120	仕事	117
感じる	101	感じる	85
自分	86	生活	83
生活	81	自分	71
影響	69	増える	52
考える	65	考える	51
時間	63	人	50
不安	59	時間	48

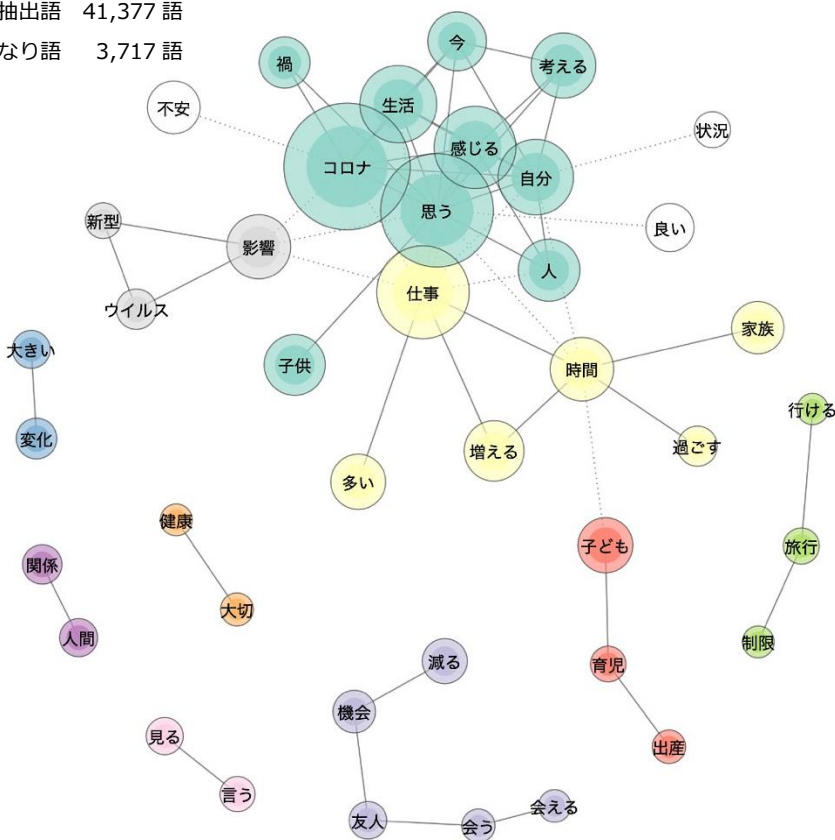
「コロナ」という時代

アンケート票の最後にある自由に記述していただくスペースで、どのようなことが語られているのかを整理してみました。

左の表は記述されている文章のなかで、頻出した単語の上位10個をそれぞれまとめたものです。どちらの年も「コロナ」という言葉がもっとも多く登場していることから、新型コロナウイルスやコロナ禍という状況に対する関心が非常に高かったことがうかがえます。

しかしながら、2020年には「影響」や「不安」といった言葉も多かった一方で、2021年では上位10にはあがりませんでした。コロナ禍の終息が見えてこないなかで、コロナ禍に対するうけとめかたが徐々に変化しているのかもしれない。

総抽出語 41,377語
異なり語 3,717語



生活を考える契機となった

コロナ禍

記述されている文章のなかで、どのような言葉とどのような言葉と一緒に登場するか、言葉と言葉のつながりを分析して、描画しました。

2020年と2021年を合わせてみると、「コロナ」と「生活」「自分」「思う」「感じる」「考える」といった言葉が一緒に使われていることから、コロナ禍という困難な状況でも、それを自分の生活や人生を考えなおす契機として、ポジティブに捉えなおそうとしている様子がうかがえます。実際に書かれた内容からも、そうした意見や態度が見出されます。

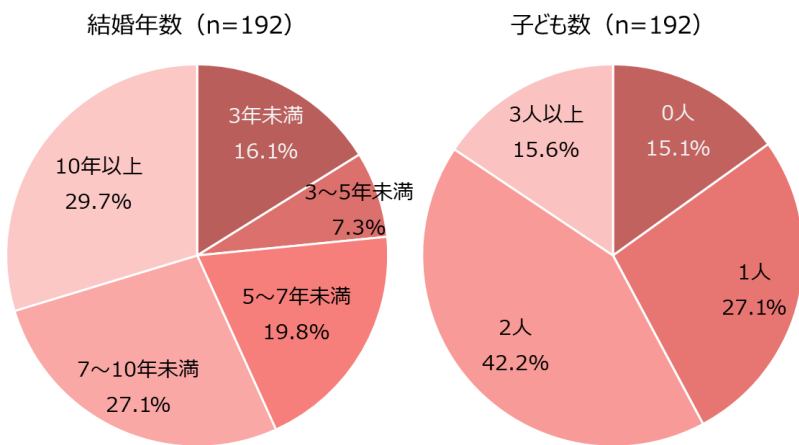
また「家族」「時間」「過ごす」「増える」といった言葉のつながりから、コロナ禍によって、はからずも家族と過ごす時間が増えたと考えられていることもわかります。

しかしながら、「仕事」「多い」「増える」といったつながりからは仕事が増大していることや、「友人」「会う」「機会」「減る」などのつながりからは友人関係への影響など、やはりコロナ禍による影響や変化の大きさも推しはかれる結果となりました。

配偶者・パートナーの方々への4回目の調査を実施しました

2018年度の調査から始まった皆さまの配偶者の方やパートナーの方への調査（配偶者調査）も、おかげさまで4回目の調査を実施することができました。今回、高卒パネルにご回答いただいた403名のうち既婚者（事実婚も含む）は256名でしたが、そのうち75%の方々にご協力をいただき、192組のペアデータを収集いたしました。皆さまのご協力に改めてお礼申し上げます。これからも夫婦・家族の実態、直面している問題点や課題を掘り下げていきますので、同封させていただいた「結婚と日常生活に関するアンケート調査（第5回）配偶者票」を配偶者・パートナーの方々にお渡しくださいますよう、お願い申し上げます。

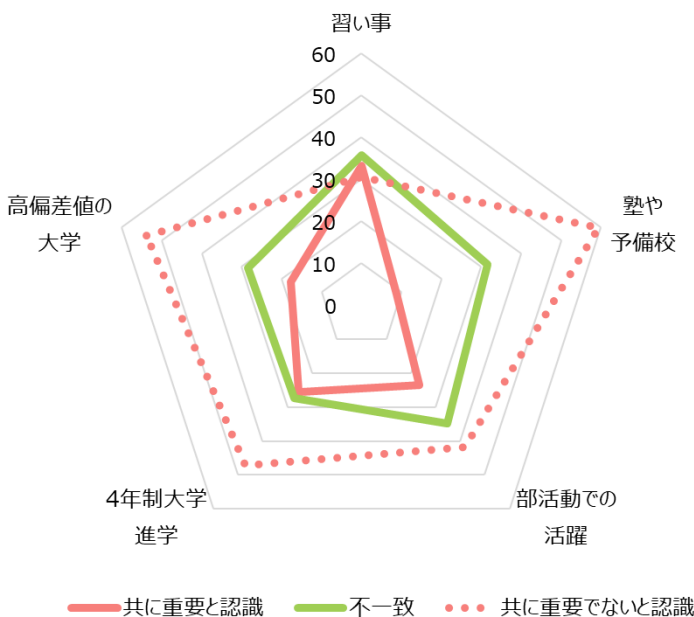
ご回答いただいたカップルの結婚年数と子どもの状況



結婚5年以上が8割弱で、子ども数「2人」が最多

結婚年数は、最多が「10年以上」、次いで「7~10年未満」でした。結婚期間が5年以上のカップルが8割に迫り、結婚年数が長くなる傾向がみられます。またカップルの85%に子どもがおり、子ども数は「2人」の4割が最も多く、次いで「1人」が3割を占めています。

子どもにとって重要なこと



夫婦の考えはおおむね一致 学校外教育や高偏差値の大学への進学はあまり重要ではない

子どもにとって重要なことについての夫婦の考えを項目別に集計しました。

夫婦で異なる意見をもっている割合はいずれの項目でも3割程度と低く、似た考えをもつ夫婦が多いことがわかります。「塾や予備校に通うこと」「4年制大学への進学」「偏差値の高い大学へ入ること」といった学業に関連する項目については、夫と妻のどちらも重要ではないと回答する割合が5割程度でした。学業以外の習い事や部活動での活躍といった経験を重要だと考える割合が多いことがうかがえます。